

# 七宝の柱

泉鏡花

青空文庫



山吹やまぶきつつじが盛さだのに、その日の寒さは、俛くるまの上で幾度も外そで套の袖をひしひしと引ひき合あわせた。

夏なつ草くさやつわものどもが、という芭蕉ばしやうの碑いしが古塚ふるづかの上に立

つて、そのうしろに藤原氏ふじわらし三代栄華の時、竜頭りゆうづの船ふねを泛うかべ、

管絃かんげんの袖そでを翻ひるがえ、みめよき女おんなたちが紅くれないの袴はかまで渡わたつた、朱欄しゆらん干かん、

瑪瑙めのうの橋はしのなごりだと言う、蒼々あおあおと淀よどんだ水みづの中に、馬うまの首くびば

かり浮ういたような、青黒くろく朽くち古ふるびた杭くいが唯ただ一つ、太おく頭あたまを出だし

て、そのまわりに何なにの魚うおの影かげもなしに、幽かすかな波なみが寂さびしく卷まく。――

――雲うみに薄暗うすくい大池おほいけがある。

池いけがある、この毛越寺もうえつじへ詣もでた時も、本堂ほんどうわきの事務所じむしょと言いふ

つた処ところに、小机を囲んで、僧とは見えない、鼠だの、茶だの、無地の袴ひまはいた、閑ひまらしいのが三人控えたのを見ると、その中に火鉢はないか、赫かつと火の気の立つ……とそう思つて差さ覗しのぞいたほどであつた。

旅のあわれを、お察しあれ。……五月の中なか旬なと言うのに、いや、どうも寒かつた。

あとで聞くと、東京でも拾あ一わ枚せではふるえるほどだつたと言う。  
きしやちゆう、  
汽車中、伊達だての大木戸おおきどあたりは、真夜中のどしや降ふりで、この様子では、思おも立いたつた光ひかり堂どうの見物がどうなるだろうと、心細いまできづかわれた。

濃い霧もやが、重かさり重なり、汽車と諸もろともに駈かけりながら、その百鬼ひやくき

夜行やこうの、ふわふわと明けゆく空に、消際きえぎわらしい顔で、硝子窓がらすを覗のぞいて、

「もう！」

と笑つて、一つ一つ、山、森、岩の形を躪あらわす頃から、音もせず、霧雨になつて、遠近おちこちに、まばらな田舎家いなかやの軒とともに煙りつつ、仙台に着いた時分に雨はあがつた。

次第に、麦も、田も色には出たが、菜種なたねの花も雨にたたかれ、畠はたけに、あぜあぜに、ひよろひよると乱れて、女郎花おみなえしの露を思わせるばかり。初夏はおろか、春たけなわの闌な景色とさえ思われない。

ああ、雲が切れた、明あかるいと思ふ処ところは、

「沼だ、ああ、大沼おおきだ。」

と見る。……雨水が渺々びようびようとして田を浸すので、行く行く山の陰は陰惨として暗い。……処々ところどころ巖蒼く、ぽつと薄紅うすあかく草が染まる。嬉しや日うれが当たると思えば、角つのぐむ蘆あしに交り、生茂おいしげる根笹ねざさを分けて、さびしく石楠花しやくなげが咲くのであった。

奥の道は、いよいよ深きにつけて、空は弥いやが上に曇った。けれども、志こころざしす平泉ひらいずみに着いた時は、幸いに雨はなかつた。

そのかわり、俚くるまに寒い風が添ったのである。

——さて、毛越寺では、運慶うんけいの作と称となる仁王尊におうそんをはじめ、数ある国宝を巡覧せしめる。

「御参詣の方にな、お触さわらせ申しはいたさんのじゃが、御信心かに見受けますので、差支えませぬ。手に取って御覧なさい、さ、

「さ。」

と腰袴こしばかまで、細いしなない竹の鞭むちを手にした案内者の老人が、硝子蓋がらすぶたを開けて、半ば繰くりひら開いてある、玉軸金泥ぎよくじくこんでいの経きようを一巻、手渡しして見せてくれた。

その紺地こんじに、清く、さらさらと装もりあが上った、一行金いちぎようきんじ字、一行銀書いちぎようぎんじよの経である。

俗に銀線に触るるなどと言うのは、こうした心持こころもちかも知れない。尊たつとい文字は、掌てに一字ずつ幽かすかに響いた。私は一拜いっぱいした。「清衡朝臣きよひらあそんの奉供ぶぐ、一切経いっさいききようのうちであります——時価じかで申しますとな、唯ただこの一巻でも一万円以上であります。」

橘南谿たちばなんけいの東遊記とうゆうきに、

これは清衡きよひら存生ぞんじょうの時、自在坊蓮光じざいぼうれんこうといへる僧に命じ、一切経書写の事を司つかさどらしむ。三千日が間、能書のうしよの僧數百人を招請しょうせいし、供養し、これを書写せしめしとなり。余よもこの経を拜見せしに、その書体楷法かいほう正しく、行法ぎょうほうまた精妙にして――

と言うもの即すなわちこれである。

ちよつと（この寺のではない）或案内者あるに申すべき事がある。

君が提ささげて持った鞭だ。が、遠くの掛軸かけじくを指し、高い処ところの仏像を示すのは、とにかく、目前まへに近々ちかぢかと拝まるる、観音勢至かんおんせいしの

金像きんぞうを説明すると言つて、御目おんめ、眉の前へ、今にも触れそうに、

ビシャビシャと竹の尖さきを振うのは勿体もったいない。大慈大悲の仏たち

である。大して御立腹もあるまいけれども、作が<sup>さく</sup>いいだけに、瞬<sup>またたき</sup>もしたまいそうで、さぞお鬱<sup>うつとう</sup>陶<sup>とう</sup>しかろうと思う。

俵<sup>くるま</sup>は寂然<sup>しん</sup>とした夏草塚<sup>なつくさづか</sup>の傍<sup>そば</sup>に、小さく見えて待つていた。まだ葉ばかりの菖蒲<sup>あやめ</sup>杜<sup>かきつばた</sup>若<sup>わ</sup>が隈<sup>くま</sup>々に自然と伸びて、荒れたこの広い境<sup>けい</sup>内<sup>だい</sup>は、宛然<sup>さながら</sup>沼<sup>ぬま</sup>の乾いたのに似ていた。

別に門らしいものもない。

此<sup>ここ</sup>処<sup>ちこ</sup>から中尊<sup>ちゆうそん</sup>寺<sup>じ</sup>へ行く道<sup>みち</sup>は、参詣<sup>さんぎ</sup>の順<sup>しゅん</sup>をよくするため、新<sup>あらた</sup>たに開いた道<sup>みち</sup>だそうで、傾いた茅<sup>かや</sup>の屋根<sup>やね</sup>にも、路<sup>みち</sup>傍<sup>そば</sup>の地蔵<sup>じぞう</sup>尊<sup>そん</sup>にも、一<sup>いち</sup>々<sup>いち</sup>由緒<sup>いぢいぢ</sup>のあるのを、車<sup>わかいしゆ</sup>夫<sup>ふ</sup>に聞きながら、金鷄<sup>きんけい</sup>山<sup>さん</sup>の頂<sup>いただき</sup>、柳<sup>たち</sup>の館<sup>たて</sup>あとを左右に見つつ、俵<sup>くるま</sup>は三代の豪奢<sup>ごうしゃ</sup>の亡<sup>な</sup>びたる、草<sup>こみち</sup>の径<sup>ぢやう</sup>を静<sup>しずか</sup>に進<sup>すす</sup>む。

山吹がいまを<sup>さかり</sup>壮に咲いていた。丈<sup>たけたか</sup>高く伸びたのは、車の上から、花にも葉にも手が届く。——何<sup>どこ</sup>処<sup>やしき</sup>か邸<sup>ごう</sup>の垣<sup>ごし</sup>根<sup>こし</sup>越<sup>し</sup>に、それも偶<sup>たま</sup>に見るばかりで、我ら東京に住むものは、通りがかりにこの金衣<sup>きんい</sup>の娘<sup>じようじよう</sup>々<sup>じようじよう</sup>を見る事は珍しいと言つても可<sup>よ</sup>い。田舎の他<sup>ほか</sup>土地<sup>ちち</sup>とても、人家の庭<sup>せど</sup>、背戸<sup>せど</sup>なら格別、さあ、手折<sup>たお</sup>つても抱いてもいいよ、とこう野中<sup>のなか</sup>の、しかも路<sup>はた</sup>の傍<sup>た</sup>に、自由に咲いたのは殆ど見た事がない。

そこへ、つつじの赤いのが、ぽーとなつて咲<sup>さきまじ</sup>交<sup>まじ</sup>る。……  
 が、燃<sup>もえた</sup>立つようなのは一株も見えぬ。霜<sup>しも</sup>に、雪に、長く鎖<sup>とぎ</sup>された上に、風の荒ぶる野に開く所<sup>せ</sup>為<sup>い</sup>であるう、花卉<sup>うすくれないさんご</sup>が皆堅い。山吹は黄なる貝を刻んだようで、つつじの薄紅<sup>うすくれないさんご</sup>は珊瑚<sup>さんご</sup>に似ていた。

音のない水が、細く、その葉の下、草の中を流れている。それが、潺々せんせんとして巖いわに咽むせんで泣く谿河たにがわよりも寂さみしかった。

実際、この道では、自分たちのほか、人らしいものの影も見なかつたのである。

そのかわり、牛が三頭、犢こうしを一頭ひとつ連れて、雌雄めすおすの、どれもずずんと大く真黒まおきなのが、前途ゆくての細道を巴ともえがた形ふさに塞ふさいで、悠々と遊んでいた、渦が巻くようである。

これにはたじろいだ。

「牛飼うしかいも何もいない。野放しだが大丈夫かい。……彼奴あいつ猛獸まうじゆだからね。」

「何ともしやあしましねえ。こちとら馴染なじみだで。」

けれども、胸が細くなつた。轆棒かじで、あの大きい巻斑まきふのある角つのを分けたのであるから。

「やあ、汝われ、……小僧も達たつしやがな。あい、御免。」

敢あえて獣の臭けものにおいさえもしないで、縦の目で優しく視みると、両方へ黒いハート形の面おもてを分けた。が牝牛めうしの如きは、何だか極りでも悪かつたように、さらさらと雨のあとの露ちぢらを散して、山吹の中へ角を隠す。

私はそれでも足を縮めた。

「ああ、漸やっと衣ころもの関せきを通つたよ。」

全く、ほつとしたくらいである。振向いて見る勇氣もなかつた。小家こいえがちよつと両側に続いて、うんどん、お煮染にしめ、御酒おんさけなど

の店もあつた。が、何処へも休まないで、車夫は坂の下で俵をおろした。

軒端のきばに草の茂つた、その裡なかに、古道具をごつごつと積んだ、暗い中に、赤絵あかえの茶碗、皿まじの交つた形は、大木の空洞うつろに茨いばらの实こぼの溢こぼれたような風情ふぜいのある、小さな店を指して、

「あの裏に、旦那、弁慶べんけい手植てうえの松があるで——御覧になるかな」

「いや、帰途かえりにしましょう。」

その手植の松より、直接じかに弁慶にお目めに掛かつた。

樹立こたちの森しんしん々々として、聊いささかもすこの凄すこいほどな坂道——岩いわ膚はだを踏

むようで、泥濘ぬかりはしないがつるつるとすべる。雨降りの中では草鞋わらじ

か靴でもでもないじょうげむずかと上下は難むずかしかろう——其処そこを通とお抜りぬけて、北き上川たかみがわ、衣ころも河がわ、名なにしおう、高たか館だちの址あとを望のぞむ、三方見晴あづまやしの処ところ（ここに四阿あずまやが立つて、椅子いすの類るい、木の株くさなどが三つばかり備そえてある。）其処そこへ出ると、真先まへに案内あんないするのが弁慶堂べんけいどうである。

車わかいしゆ夫うが、笠かさを脱ぬいで手に提さげながら、裏道うらみちを崖がけ下さがりに駈か出して行いった。が、待まちつと、間まもなく肩かたに置おき手拭てぬぐいをしたまるまげ円ま鬚げの女おんなが、堂どうの中なかから、扉かどを開ひらいた。

「運慶うんけいの作しやうでござります。」

と、ちよんと坐まつてて言う。誰たれでも構かまわん。この六尺むくわ等身とうしんと称なうる木像ぼくざうはよく出来いている。山車だしや、芝居しばいで見みるのとは訳わけが違ちがう。

顔の色が蒼白い。大きな折烏帽子が、妙に小さく見えるほど、頭も顔も大の悪僧の、鼻が扁く、口が、例の喰しばった可恐しい、への字形でなく、唇を下から上へ、への字を反対に擱つて、

「むふッ。」

ニタリと、しかし、こう、何か苦笑をしていそうで、目も細く、目皺が優しい。出額でまたこう、しゃくうように人を視た工合が、これで魂が入ると、麓の茶店へ下りて行って、少女の肩を大な手で、

「どうだ。」

と遣りそうな、串戯ものの好々爺の風がある。が、齒が抜けたらしく、豊かな肉の頬のあたりにげっそりと窶の見えるのが、

判官はんがんに生命いのちを捧げた、苦勞のほどが偲しのばれて、何となく涙ぐま  
るる。

で、本文ほんもん通り、黒革くろかわ緘おどしの大おお鎧よろい、樹蔭こかげに沈んだ色なが  
ら鎧よろいの袖そでは颯爽さつそうとして、長刀ながなたを軽くついて、少し屈こげみかかっ  
た広い胸えものに、兵えの柄えのしなうような、智と勇とが満ちて見える。  
かつ柄も長くない、頬ほお先さきに内側うちがわにむけた刃も細い。が、かえつ  
て無比の精銳を思わせて、颯さつと掉ふると、従つて冷い風が吹きそう  
である。

別に、仏菩薩ぶつぼさつの、尊とうい古像が架かに据えて数々ある。

みどり児ごを、片袖かたそでで胸むねに抱いだいて、御顔おんかおを少し仰向あおむけに、吉  
祥果つしようかの枝を肩かたに振掛ふりかけ、裳もすそをひらりと、片足を軽く挙げて、――

—いいぐさは拙つたいが、舞まいなどしたまう状さまに、たとえば踊りながら  
 でんでん太鼓で、児こをおあやしのような、鬼き子し母ぼ神じんの像があつた。  
 御おん面おもては天女ひとに齊ひとしい。彩いろどり色いろはない。八寸ばかりのほのぐら  
 い、が活けるが如きき木彫きぼりである。

「戸を開けて拝んでは悪いんでしようか。」

置おきてぬぐい手拭てぬぐいのが、

「はあ、其そこ処こは開けません事ことになつております。けれども戸棚で  
 ございますから。」

「少々ばかり、御免下さい。」

と、網の目の細い戸を、一、二寸開けたと思うと、がつちりと  
 支つかえたのは、亀井六郎かめいろくろうが所持と札を打つた笈おいであつた。

三十三枚の櫛くし、唐の鏡とう、五尺のかつら、紅くれなはの袴かまかさね、重きぬの衣おさも納めつと聞く。……よし、それはこの笈あしにてはあらずとも。

「ああ、これは、疵きずをつけてはなりません。」  
棚が狭いので支つかえたのである。

そのまま、鬼子母神を礼して、ソツと戸たを閉てた。

連つれの家内が、

「粹いきな御おすがた像がたですわね。」

と、ともに拝んで言った。

「失礼な事を、——時に、御案内料は。」

「へい、五銭。」

「では——あとはどうぞお賽さい銭せんに。」

そこで、よろいぎ 鎧着たたのもしい山法師に別れて出た。

山道、二町ばかり、中尊寺はもう近い。

おおき 大な広い本堂に、一体見上げるようなしやくそん 釈尊のほか、せきぱく 寂寞

として何も無い。それが莊嚴であつた。日の光がかすか 幽に漏れた。

裏門の方へ出ようとする傍に、かたわら 寺の廚があつて、そこ 其処で巡覽券

を出すのを、わかいしゆ 車夫が取次いでくれる。巡覽すべきは、はじめ

やくしどう 薬師堂、次の宝物庫、さてこんじきどう 金色堂、いわゆるひかりどう 光堂。続

いてきようぞう 経藏、べんざいてん 弁財天と言う順序である。

皆、参詣の人を待つて、はじめて扉を開く、すぐまたあとをとぎ 鎖

すのである。が、ほうもつぐら 宝物庫には番人がいて、とし 年紀の少い

出家が、火の気もなしに一人きようづくえ 経机むか に対つていた。

はじめ、薬師堂に詣でて、それから宝物庫を一巡すると、この番人のお小僧が鍵を手にして、ひとつすじ一条、道を隔てた丘の上に導く。……きざはし階の前に、やえざくら八重桜が枝も撓たわわに咲きつつ、かつ芝生に散つて敷いたようであつた。

桜は中尊寺の門内にも咲いていた。ふもと麓から上ろうとする坂の下とツつきところの取着的ひとつもとの処にも一本見事なものがあつて、さんちゆうこころえ山中心得の条じよう々じようを記した禁札きんさつと一いつしよ所に、たしか「浅葱桜」といふ札が建つていた。けれども、そのみには限らない。ところどころ処々汽車の窓から視みた桜は、奥が暗くなるに従つて、ぱつと冴さえを見せて咲いたのはなかつた。うすずみ薄墨、うこん鬱金、またその浅葱あさぎと言つたような、どの桜も、皆ぱつとりとして曇つて、暗い紫を帯びていた。雲が

黒かつたためかも知れない。

唯、階とぎざの前の花片はなびらが、折からの冷い風に、はらはらと誘われ

て、さつと散つて、この光堂そうどうの中を、空そらざまに、ひらりと紫に舞

うかと思うと——羽目はめに浮彫うきぼりした、孔雀くじゃくの尾に玉を刻んで、

緑ろくしやう 青せいに錆びたのがなお厳おんに美しい、その翼を——ぱらぱらと

たたいて、ちらちらと床にこぼれかかる……と宙で、黄金きんの巻まき

柱しらの光をうけて、ぱつと金色こんじきに飜ひるがえるのを見た時は、思わず驚

歎ひとみの瞳みを睜みつた。

床も、承塵なげしも、柱は固もとより、イめるものの踏む処ところは、黒漆こくしつの

落ちた黄金きんである。黄金きんの剥はげた黒漆とは思われなくて、しかも

些さのけばけばしい感じが起らぬ。さながら、金粉の薄雲の中に立

つた趣おもむきがある。われら仙骨せんこつを持たない身も、この雲はかつ踏んでも破れぬ。その雲を透すかして、四方に、七宝莊嚴しつぼうそうごんの卷柱まきばしらに對するのである。美しき虹を、そのまま柱にして絵えがかれたる、十二光じゅうにこうぶつ仏の微妙なる種々相しゅじゅそうは、一つ一つ錦にしきの糸に白露しらつゆちりばを鏤らめた如く、玲瓏れいろうとして珠しゆぎよく玉たまの中にあらわれて、清く明かに、しかも幽かすかなる幻である。その、十二光仏の周圍には、玉たま、螺鈿らでんを、星の流るるが如く輝かして、宝相華ほうそうげ、勝曼華しょうまんげが透間すきまもなく咲きめぐつている。

この柱が、須弥壇しゆみだんの四隅しぐうにある、まことに天上の柱である。須弥壇は四座しざあつて、壇上には弥陀みだ、觀音かんおん、勢至せいしの三尊さんぞん、二天てん、六地藏ろくじぞうが安置され、壇の中は、真中に清衡きよひら、左に基衡もとひら、

右に秀衡の棺が納まり、ここに、各一口の剣を抱き、鎮守府將軍の印を帯び、錦袍に包まれた、三つの屍がまだそのままに横わつてゐるそうである。

雛芥子の紅は、美人の屍より開いたと聞く。光堂は、ここに三個の英雄が結んだ金色の果なのである。

謹んで、辞して、天界一叢の雲を下りた。  
 階を下りざまに、見返ると、外囿の天井裏に蜘蛛の巣がか

かつて、風に軽く吹かれながら、きらきらと輝くのを、不思議なる塵よ、と見れば、一粒の金粉の落ちて輝くのであった。

さて経蔵を見よ。また弥が上に可懐い。

羽目には、天女——迦陵頻伽が髣髴として舞いつつ、かな

でつつ浮出ている。影をうけた束、貫の材は、鈴と草の花の玉の螺鈿である。

うるしぬり  
漆塗

金の八角の台座には、本尊、文珠師利、朱の獅子

に騎しておわします。獅子の眼は爛々として、赫と真赤な口を

開けた、青い毛の部厚な横顔が視られるが、ずっと足を挙げそ

うな構えである。右にこの轡を取つて、ちよつと振向いて、菩薩

にものを言いそうなのが優玉、左に一匣を捧げたのは善哉童子。

この両側左右の背後に、浄名居士と、仏陀波利が

一は払子を振り、一は錫杖に一軸を結んだのを肩にかつぐ

ように杖いて立つ。額も、目も、眉も、そのいづれも莞爾莞爾と

して、文珠も微笑んでまします。第一獅子が笑う、獅子が。

この須弥壇しゆみだんを左に、一架いつかを高く設けて、ここに、紺紙こんしきん金泥きんの一卷を半ば開いて捧げてある。見返しは金泥きん銀泥いぎんで、本ほん経きやうの図解を描く。……清麗巧緻せいらいこうちにしてかつ神秘である。

いま此処ここに来てこの経を視みるに、毛越寺の彼はあたかも砂金を捧ぐるが如く、これは月光を仰ぐようであつた。

架かの裏に、色の青白い、瘦やせた墨染すみぞめの若い出家が一人いたのである。

私の一札に答えて、

「ご緩ゆるり、ご覧なさい。」

二、三の散佚さんいつはあろうが、言うまでもなく、堂の内壁ないへきにめぐらした八の棚やつに満ちて、二代基衡もとひらのこの一切経いっさいきやう、一代清き

よひら  
 衡の金銀泥きんぎんでいいちぎよう一行ならびまぜ書がきの一切経ほうがんびいき、並ならびに判官はんくわん鬚ひげの第一  
 人者、三代秀衡ひでひら老雄の奉納した、黄紙宋板おうしそうばんの一切経が、みな  
こくよう黒耀の珠玉の如く漆うるしの架かに満ちている。——一切経の全部量は、  
しちだかたうま七駄片馬と称うるのである。

「——拝見をいたしました。」

「はい。」

と腰衣こしごろもの素足で立つて、すつと、経堂を出て、朴ほおば齒たかあの高  
しだ足駄で、巻袖まきそでで、寒ほっそく細りと草ゆを行く。清らかな僧であつた。

「弁天堂を案内しますで。」

と車夫わかいしゆが言った。

向うを、墨染すみぞめで一人行ゆく若僧にやくそうの姿さびが、寂しく、しかも何

となくとうと貴く、正に、まさしく彼かしこ処におわする……天女の御おんまえ前へ、われらを導く、つつましく、謙讓なる、一個のお取次のように見えた。

かくてこそ法師たるものの効かいはあろう。

世に、緋、紫、金きんらん欄、緞どんす子を装よそおうて、伽藍がらんに処すること、高こ家うけだい諸侯しよこうの如く、あるいは仏菩薩ぶつぼさつの玄関番として、衆しゆうぞく俗ぞくを、受附うけつけで威張いばつて追おっばら払うようなのが少くない。

そんなのは、僧侶しゆいなど、われらと、仏神ぶつじんの中を妨しやうぐる、姑しゆうとだ、こじゆうと小姑せうこだ、受附うけつけだ、三太夫さんたふだ、邪魔じやまものである。

衆しゆうじゆう生じゆうは、きやつばらを追おいはら払つて、仏にも、祖師そしにも、天女てんじゆうにも、直接じかにお目にかかつて話わすがいい。

時に、経堂を出た今は、真昼ながら、月光に酔い、桂の香に巻かれた心地がして、乱れたままの道芝を行くのが、青く清明なる円い床を通るようであつた。

きざはし

階の下に立つて、仰ぐと、典雅温優なる弁財天の金字に縁

して、牡丹花の額がかかる。……いかにや、年ふる雨露に、彩

いしき

色のかすかになつたのが、木地の胡粉を、かえつてゆかしく顕

わして、萌黄に群青の影を添え、葉をかさねて、白緑碧

らん

藍の花をいだく。さながら瑠璃の牡丹である。

ふと、高縁の雨落に、同じ花が二、三輪咲いているように

見えた。

扉がギイ、キリキリと……僧の姿は、うらに隠れつつ、見えす

に開く。

ぽかんと立ったのが極きまりが悪い。

ああ、もう彼処あそこから透見すきみをなすつた。

とそう思うほど、真白ましろき面影、天女の姿は、すぐ其処そこに見えさ

せ給う。

私は恥じて俯向うつむいた。

「そのままでお宜よろしい。」

壇は、下駄げたのまままでと彼の僧かが言うのである。

なかなか。

足袋たびの、そんなに汚れていないのが、まだしもであつた。

蜀しよくこう 紅にしきの錦にしきと言う、天蓋てんがいも広くかかつて、真黒まくろき御髪みぐしの宝ほ

釵うさぎの玉一つをも遮さえぎらない、御面影おんおもかげの妙たえなること、御目ざしの  
 美うしさ、……申おそれさんは恐おそれ多い。ただ、西かの方はる遙かに、山城やましろのく  
 国に、浄瑠璃じようり寺でら、吉祥きつし天ようてんのお写真きつしに似きつしさせ給う。白理はくり、優ゆう  
 婉えん、明麗めいれいなる、お十八、九ほばかりの、略人ほぼとだけの坐像おんほである。  
 ト手かすかをついて対おんほしたが、見上おんほぐる瞳かすかに、御頬おんほのあたり、幽かすかに、  
 いまにも莞爾かんじと遊おんほばしそうで、まざまざとは拝おんほめない。  
 私は、端坐おんほして、いにしえの、通夜つやと言う事たしかの意味たしかを確たしかに知たしかつ  
 た。

このまふたまときに二時ふたときいたら、微妙おこえな、御声おこえが、あの、お口許くちもとの  
 微笑ほほえみから。——

さしりぞて壇しりぞを退しりぞきざまに、僧しりぞのとぎす扉しりぞにつれて、かしこくもおん

なごりさえ惜おしまれまいらすようで、涙ぐましくまた額がくを仰いだ。  
 御堂そのまま、私は碧瑠璃へきるりの牡丹花ぼたんかの裡うちに入つて、また牡丹花の  
 裡から出たようであつた。

花の影が、大な蝶おおきちようのように草に映さした。

月ある、明あきらなる時、花の朧おぼろなる夕ゆう、天女が、この縁側えんがわに、ち

よつと端居はしいの腰を掛けていたまうと、経蔵から、侍士じし、童子どうじ、扨ほ

子つす、錫杖しゃくじようを左右に、赤い獅子きに騎きして、文珠師利もんじゆしりが、悠然と、

草をのりながら、

「今晚は——姫君、いかが。」

などと、お話がありそうである。

と、麓ふもとの牛が白象びやくぞうにかわつて、普賢菩薩ふげんぼさつが、あの山吹のあ

たりを御散歩。

まつたく、一山いっさんの仏たち、大おおきな石地蔵いしじぞうも凄すごいように生きて

いらるる。

下向げこうの時、あらためて、見霽みはらしの四阿あずまやに立った。

伊勢かめい、亀井かたおか、片岡わしのお、鷲尾わしのお、四天王の松は、畑はたなか中あぜ、畝あぜの四

ところところ、処ところに、雲を鎧よろい、繇ゆるぎいと糸の風を浴びつつ、或あるものは肅しゆくしゆく々々

として衣ころもがわ河かに枝そびやを聳そびやかし、或あるものは恋れんれん々々として、高館たかだちに

梢こずえを伏せたのが、彫像なの如なくに視ながめらるる。

その高館たかだちの址あとをば静しずかにめぐつて、北上川きたがはの水は、はるばる、

瀬もなく、音もなく、雲はての涯はてさえ見えす、ただ（はるばる）と言

うように流るるのである。

「この奥に義経公。」

くるまや  
車夫の言葉に、私は一度俵を下りた。

帰途は——今度は高館を左に仰いで、津軽青森まで、遠く続くという、まばらに寂しい松並木の、旧街道を通つたのである。

松並木の心細さ。

途中で、都らしい女に逢つたら、私はもう一度車を飛下りて、  
手も背もかしたであろう。——判官にあこがるる、静の霊を、  
幻に感じた。

「あれは、鮭かい。」

すれ違つて一人、澁刺たる大魚を提げて駈通つたものが

ある。

「鱒ますだ、——北上川で取れるでがすよ。」

ああ、あの川を、はるばると——私は、はじめて一ひとつ条長く細く水の糸を曳ひいて、魚うおの背せとともに動く状さまを目に宿したのである。「あれは、はあ、駅長様の許とこへ行くゆだかな。昨日きのうも一尾いっぴき上りました。その鱒ますは停車場前ていしやばの小河屋おがわやで買ったでがすよ。」

「料理屋かね。」

「旅籠屋はたごやだ。新築でがしてな、まんずこの辺あそこでは彼店あそこだね。まだ、

旦那、昨日はその上に、はい鯉こいを一尾いっぴき買入れたでなあ。」

「其処そこへ、つけておくれ、昼食ちゆうじきに……」

——この旅籠屋は深切しんせつであつた。

「鱒がありますね。」

と心得たもので、

「照てりやき焼にして下さい。それから酒はびんづめ罎詰のがあつたらもらいたい、なりたけいいのを。」

束そくはつ髪に結ゆつた、丸まるほちやなのが、

「はいはい。」

と柔すなお順じゆんだつけ。

小用こようをたして帰ると、もの陰かげから、目をまる円まるくして、一大事いちだいじそう  
に、

「あの、旦那様。」

「何なにだい。」

「照焼にせいという、お誂あつらえですがなあ。」

「ああ。」

「川鱒かわますは、塩をつけて焼いた方がおいしいで、そうしては不可いけないですかな。」

「ああ、結構だよ。」

やがて、膳に、その塩焼と、別に誂えた玉子焼、青菜のひたし。椀がついて、蓋を取ると鯉こいこく汁である。ああ、昨日のだ。これはしかし、活きたのを料りょうられると困ると思つて、わざと註文はしなかつたものである。

口を溢こぼれそうに、なみなみと二合のお銚子ちょうし。

いい心持こころもちの処ところへ、またお銚子が出た。

喜多八きたはちの懷中、これにきたなくもうしろを見せて、

「こいつは余計だつけ。」

「でも、あの、四合しごうびん鑊一本、よそから取って上げましたので、なあ。」

私は膝を拍うつて、感謝した。

「よし、よし、有ありがと難う。」

香こうのものがついて、御飯をわざわざ炊たいてくれた。

これで、勘定が——道中記には肝心な処だ——二円八十錢……  
二人分ににんです。

「帳場の、おかみさんに礼を言つて下さい。」

やがて停車場へ出ながら視みると、旅はたご店の裏がすぐ水田みずたで、隣となり

との地境じぎかい、行抜けゆきぬの処ところに、花壇けだんがあつて、牡丹ぼたんが咲いた。竹の垣かきも結ゆわなないが、遊あそんでいた小児こどもたちも、いたずらはしないと見える。

ほかにも、商屋あきないやに、茶店ちあんでんに、一軒いっけんずつ、庭にわあり、背戸せどあれ

ば牡丹ぼたんがある。往来ゆきぎの途中ちゆうちゆうも、皆みなそうであつた。かつ溝川みぞがわにも、

井戸端いどにも、傾かたいた軒のき、崩くずれれた壁かべの小家こいえにさえ、大抵たいてい皆みな、菖蒲あやめ、

杜かきつばた若わかを植うえていた。

弁財天みこころの御心みこころが、自らおのずか土地ちにあらわれるのであろう。

たちま 忽たちまち、風かぜ暗くく、柳なみが靡なびいた。

ステーション 停車場ていしやうじやうへ入いつた時は、皆待合室みなまちむろにいすくまつたほどである。風

は雪ゆきを散ちらしそうに寒さむくなつた。一千年いっせんねんのいにしえの古戦場ふるせんじやうの威い

力である。天には雲と雲と戦った。



# 青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

2001（平成13）年2月5日第21刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十七卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月初版発行

初出：「人間」

1921（大正10）年7月号

入力：門田裕志

校正：米田進、鈴木厚司

2003年3月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 七宝の柱

## 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>